

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. **22**

編集 1990・11・6
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 田中 猛 善
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大
里乙3617-5



そめつけまつにつるもんりん か おおざら
染付松鶴文輪花大皿

館蔵資料

有田皿山

17世紀末～18世紀初頭

口径33.8cm 高さ6.2cm

高台径21.5cm

松に鶴、梅に鶯という日本人にもよく知られた吉祥文様を描いている。八稜の輪花形に型打成形された大皿で、口縁に口鏝を施す。裏面は唐草文がぐるりとめぐるされ、高台内に渦福銘が入る。

ヨーロッパに同様の器形の大皿が伝世しているが、この資料は柴田ご夫妻から寄贈された柴田コレクションの中の1点である。

行事・展覧会報告

〈特別企画〉

海を渡った肥前のやきもの展

開館10周年を記念して、「海を渡った肥前のやきもの」展が、11月1日から12月9日まで、第1・2・3展示室において開催されます。

この展覧会は17世紀後半から18世紀に東南アジアへ輸出された肥前陶磁の実態を明らかにするもので、伝世品や遺跡からの出土陶片など総計 457点が展示された。これまでヨーロッパに向けて輸出された肥前磁器については、研究も進み、展覧会も行われてきたが、東南アジアについては、ほとんど知られていなかった。今回の展覧会では、ヨーロッパに輸出されたものと同種の磁器も勿論あるが、主に東南アジア向けに生産され、輸出されたと考えられる種々の肥前磁器や、また陶器も確認することができ、意義深い展観となった。

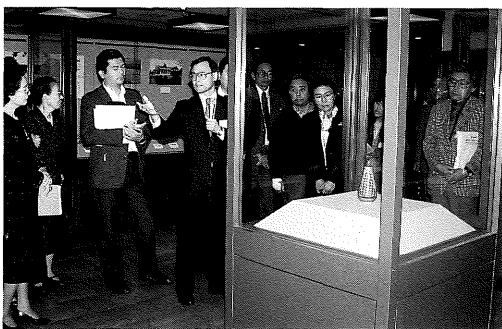
11月1日に開会式が行われ、特別来賓として、インドネシア国から教育文化省・文化長官のプーゲル氏、元ジャカルタ国立博物館・陶磁室長のアブ・リド氏、タイ国から文化省・副長官のソムキッド氏と国立中央博物館・主任学芸員のプラトム氏、またインドネシア在住の実業家で陶磁コレクターの進藤仁氏とその夫人、同じくコレクターで、本展の開催に協力いただいたリンダ・ブディアルジョ氏、さらに文化庁の山本信吉鑑査官など、多数の来賓を迎え、挙行された。また開会式当日の夕刻には歓迎レセプションも行われ、大いに交流の輪がひろがりました。



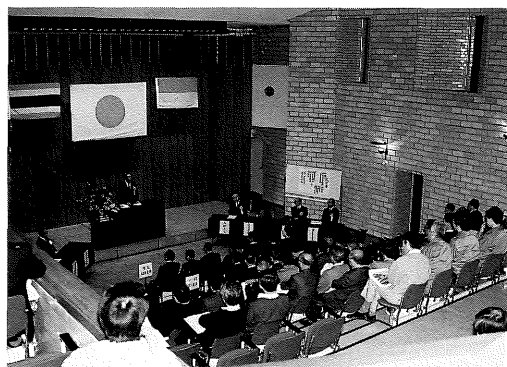
開会式に出席された特別来賓の方々。左からリンダ夫人、進藤夫人、進藤氏、アブ・リド氏、プーゲル氏、ソムキッド氏、プラトム氏。



テープ・カット風景



展示室で列品解説をする大橋資料係長



開会式風景

第17期・18期陶芸教室

第17期陶芸教室（平成2年6月2日～8月4日・講師は大宅利秋先生）、第18期陶芸教室（平成2年8月18日～10月20日・講師は中村隆敏先生）が開催されました。17期に20名、18期に22名が受講されたが、今回は女性の参加者が多く（応募の際から）、全受講者42名のうち、実に30名が女性でした。教室では、ロクロ造りや手びねりなど熱心に作陶し、自分で作り上げた茶碗や花瓶などを手にしていました。



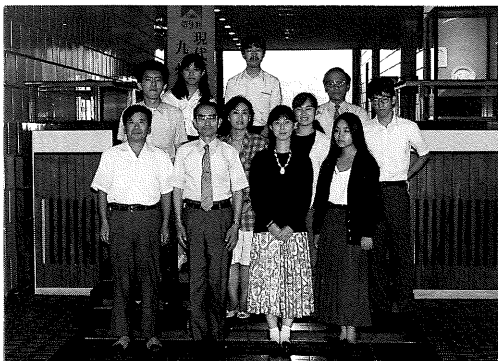
17期のみなさん



18期のみなさん

博物館学実習

平成2年度の学芸員実習は、7月23日から8月11日まで3週間行われた。受講生は西南学院大学の梅崎恵さん、八谷佳代子さん、日野尚文さん、立教大学（聴講生）の内田順子さん、オランダ村博物館の松下久子さん、有田町歴史民俗資料館の知北万里さんの6名でした。このうち、内田さんは栗田美術館に勤務されて



閉講式記念撮影

おり、学芸員の資格を得るため、遠く栃木県から参加されました。また松下さん、知北さんについては、すでに学芸員として勤務されていますが、より一層、陶磁に関する専門的知識、取扱い法を修得するために受講されました。大学生と社会人との混成の受入れでしたが、実習における態度、取組みは、その区別はなく、受講生全員がたいへん熱心で、予定の実習カリキュラムを無事に終了しました。

北川伊平並びに義治遺作展

平成2年4月5日から15日まで、第1展示室において、北川伊平並びに義治遺作展が開催されました。

この展覧会は、有田に生まれ、明治末から大正、昭和にかけて図案制作及び絵付師として活躍した北川伊平（1888～1961）と、その長男で陶磁器デザイン・制作を手がけた義治（1912～62）の作品展で、伊平が絵付した節鉢や花瓶などのほか、彼が若いころから好んで描いていた掛幅や屏風などの日本画など、また義治が残した多数の図案帖などが展示されました。有田にゆかりのある2人の遺作展ということもあって、人々の関心も高く、会期中多くの観覧者がありました。



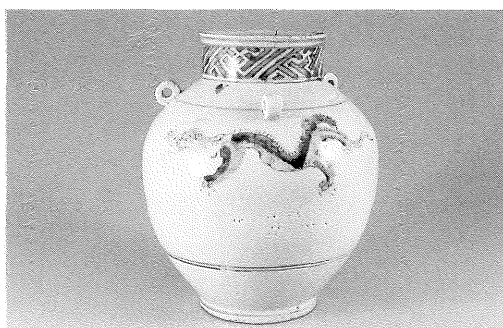
染付双龍文深鉢 北川伊平作

新収蔵品展

5月29日から6月10日まで、第1展示室において、新収蔵品展を開催しました。平成元年度に、当館で購入または寄贈を受けた資料を一般に公開するもので、古唐津や初期伊万里などの肥前陶磁や福岡、熊本などの九州陶磁等、59件91点が展示された。



展 示 風 景

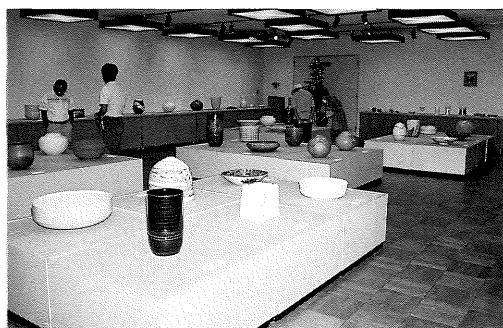


染付雲龍文三耳付壺 有田皿山 17世紀前半

佐賀県陶芸協会展

8月31日から9月9日まで、第1展示室において、佐賀県陶芸協会展が開催されました。

佐賀県陶芸協会は昭和40年に発足し、これまで各会派にとらわれることなく、会員相互の研究・研鑽の場として、また発表の場として、毎年、東京などを会場として、また例年2月には佐賀市で陶芸協会展を開催してきました。今回の展覧会は、今年、当館が開館10周年を迎え、それを記念して開かれたもので、会長今泉今右衛門氏をはじめ協会員45名の代表作1点と小品など計108点が出品・展示された。



展 示 風 景

柴田コレクション展(I)

9月15日から10月25日まで、第1・2・3展示室で柴田コレクション展(I)が開催されました。

この展覧会は、柴田明彦・祐子ご夫妻から寄贈を受けた1076件2476点の肥前磁器のうち、471件1343点を柴田コレクション(I)として紹介したもので、五寸皿、長皿、深皿、変形皿に猪口、大皿を加え、1630年代から18世紀まで年代別に構成し、展示した。

展示された資料は、その多様な意匠、造形を楽しむとともに有田焼の変遷を追うことができる質の高いコレクションで、一般の方々のみならず、業界関係者にも高い関心呼び、熱心な陶芸ファンが多数、訪れました。

9月15日に開会式が行われ、柴田夫妻に知事の感謝状と記念品が贈られました。また36日間の会期中に、20,288名の入館者があり、盛況のうちに終了しました。



テープカット風景



開会式で挨拶を述べる柴田夫妻

シリーズ

やきものにみる文様 (19)

意馬心猿文様

日本国語大辞典(小学館)によると「意馬」の項目に「意、すなわち心の働きの移り変わることを奔馬の動きの激しさにたとえた語」とあり、海道記の序「心船佯(いつはり)の為に漕ぐ、いまだ海道万里の波に棹ささず。意馬荒猿(あらまし)に馳す、関山千程の雲に鞭うたず」翁問答の四「その心の位意馬の奔走は、初学の間はおなじけれ共、その修行の道は真妄各別なり」

大慈恩寺三蔵法師伝の九「願託_二慮_一禅門_二、澄_二心定水_一、制_二情猿之逸躁_一、繫_二意馬之奔驰_一」許渾の贈杜居士詩「機尽心猿伏、神間意馬行」などを例示している。

「意馬心猿」の項目には「(馬が走り回り、猿が騒ぎ立てるのを制しがたいところから)仏語。煩惱、情欲のために、心の乱れをおさえがたいこと」とあり、

歌舞伎・和国五翠殿の一「是其俣の意馬心猿。されば此松の木は此法性の柱、貧欲の猿」雑俳・柳多留の一〇一「浅草に意馬心猿の道と町」読本・椿説弓張月の後・二一回「又ふりあぐる刀尖(きっさき)に、まはる為頼嶋君も綱手に狂ふ意馬心猿」参同契の發揮中「如其心猿不_レ定、意馬四馳、則神氣散_二乱于外_一、欲_二望結_一成還丹_二、其可_レ得乎_一」などを例示している。

また大漢和辞典(諸橋轍次著)にはこの他に、南唐書、元宗子從善傳「予之壯也、意如_レ馬、心如_レ猿(じゅう)」

趙州録遺表「心猿罷_レ跳、意馬休_レ馳」をあげている。

この作品には煩惱と情欲の象徴としての馬と猿を心という文字を頂く柱にしっかりと繋ぎとめた、いわば静かに澄みきった水のような理想的な境地をあらわした、仏教の教訓的な図柄をあらわしている。

(吉永陽三)



染付意馬心猿文輪花深皿
有田皿山 1700~1740年代
館蔵(柴田夫妻コレクション)

シリーズ

やきものの技法 (19)

貼付け

素地に文様を貼付ける技法で、貼花ともいう。型からぬいた文様を貼付けることが多いが、紐状の粘土を貼付けて文様を作るやり方もある。レリーフ状の陽刻文様を器に施す場合、ロクロで器を成形した後、素地の上に貼付ける方法と、器の表面を彫り込み、文様を浮彫にする方法、さらに文様そのものを彫り込んだ型を用いて、器胎を成形すると同時に陽刻文様を施す方法の3通りがある。

貼付けの技法は、古くは6世紀の中国の青磁や緑釉の作品にこの技法がみられ、7世紀の唐時代の三彩には盛んに用いられている。日本ではあまり発達しなかったが、17世紀以降の各地の窯で時々用いられている。ヨーロッパにおいては、18世紀のドイツの塩釉によるストーンウェアやイギリスのウェッジウッドなどに、精巧な型抜き貼付け技法がみられる。



黒釉龍文甘酒半胴甕 苗代川焼 17世紀後半 館蔵

九州の陶磁器の中では、17世紀前半の三股青磁(長崎県)や18世紀の鍋島青磁(佐賀県)に優れた貼付けの作品がある。写真の甕は、苗代川(鹿児島県)で盛んに作られたもので、龍の文様が貼付けの技法で表されている。ただし型抜きではなく、紐状の粘土を貼付け、指や篋で押さえている。この手の半胴甕には大黒文様を型抜きにして貼付けたものもある。

(鈴田由紀夫)

〈速 報〉

塩田町志田西山 1 号窯跡
の調査

塩田町には江戸後期に独特の染付大皿を焼いた志田西山という窯場があった。鍋島藩の支藩である蓮池領内の窯である。この窯場がいつごろから始まったかは明らかでなかったため、その初期とみられた志田西山 1 号窯の調査を平成 2 年 6 月 4 日～11 日に実施した。

調査の結果、窯本体は丘陵上にあり、現在墓地となっている。北東から南西に向って上る階段状の登窯である。墓地のため窯体の発掘はできなかったが、後世のカットによる露出部分や焼土散布状態など地表での観察から長さは約 40m 程、幅は約 6 m と推測される。物原は主として南東側の丘陵斜面に堆積しているが、反対側の北西斜面でも薄い堆積が確認された。

北西斜面の物原からは磁器や京焼風陶器が唐津系陶器と共に出土した。磁器は染付が主であったが、白磁碗や色絵小皿・瓶も少量出土。唐津系陶器は二彩手皿・瓶・甕や刷毛目の片口、土灰釉の甕・壺・搥鉢・捏鉢・雲助徳利、鉄釉の水注、白化粧を施した土瓶（茶出）など多種多様なものがみられた。

このうち京焼風陶器は 17 世紀後半に、京焼の写しとみられるものが伊万里市大川内山で焼かれた。これらは緻密な土を用い、薄手で高台をシャープに削り出し、その高台内に「清水」などの印銘を押捺するなど、従来の肥前陶器になかった特徴をもつ。京焼の写しを始めた 17 世紀後半には印銘を入れたが、18 世紀になると急速に印銘を施すことはすたれる。志田西山 1 号窯で採集された京焼風陶器に印銘のあるものは 1 点であり、そのほかは全て印銘がないうえに作りも雑である。

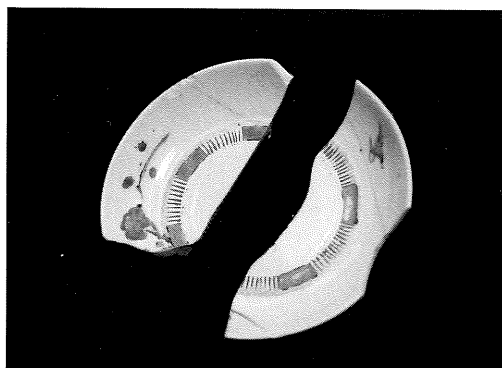
染付磁器には碗のほか、皿・猪口・瓶などがあり、18 世紀前半から中葉の年代が推測できる。色絵の小皿・瓶の出土は調査前には予想できなかった重要な発見である。

以上のことからこの窯の操業年代は 18 世紀と推測され、墓石の年代も窯体の背後には元禄以後の 18 世紀の墓石が多いが、窯体をつぶした墓地には文化以降のものがほとんどであることも製品の年代観と矛盾しない。志田西山は 1 号窯が廃窯になったあと北方に移って磁器を盛んに焼造することになる。

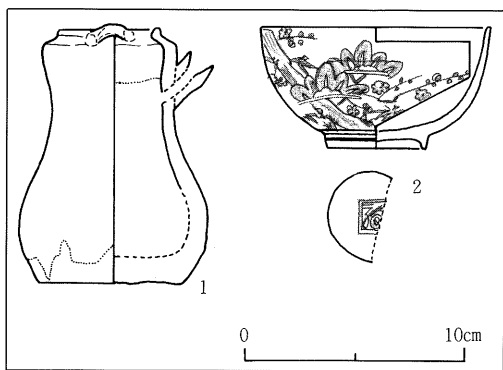
(大橋康二)



志田西山 1 号窯跡 (北西より撮影)



志田西山 1 号窯出土の色絵梅鶯文皿



志田西山 1 号窯出土の陶磁

1 は唐津系鉄釉油差し
2 は染付松竹梅文碗

利用案内

開館 午前 9 時～午後 4 時 30 分 月曜休館 年末年始 (12 月 28 日～1 月 4 日) 休館
観覧料 一般 200 円 (150 円) / 大学・高校生 150 円 (100 円) / 中・小学生 70 円 (50 円) / () 内は 20 人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交通 佐世保線有田駅下車徒歩 10 分